

熊本から発信する夏目漱石「草枕」の世界的価値

— 熊本文学隊の活動から —

跡 上 史 郎

The global value of Natsume Soseki's "Kusamakura"

Shiroh Atogami

(Received October 1, 2015)

1. 熊本文学隊の地域に根ざし世界へ向けた情報発信

熊本文学隊は、2008年4月に設立された文学的活動団体である。隊長は詩人の伊藤比呂美で、熊本文学隊という勇ましい名称は、徳富蘇峰らの「熊本バンド」にインスピレーションを得て伊藤が命名したものだ。たまたま伊藤の近くにいた稿者が代表世話人を務めてきた。

熊本文学隊としての正式なイベントの第1回は2008年、作家・池澤夏樹を迎えて行われた「世界文学ってなんだ？」¹である。この講演で池澤は、河出書房新社から刊行される世界文学全集に、ただ一人の日本人作家として石牟礼道子を収録したい旨を述べており、それは後に刊行された世界文学全集版の石牟礼道子『苦海浄土』²によって実現された。

続いてすぐに、熊本文学隊は、谷川俊太郎、伊藤比呂美、四元康祐による「連詩の魅力」³を開催している。

もともと、中央で評価を確立した後、熊本に移住し、その後さらにカリフォルニアへと居を移した伊藤比呂美の活動スケールは、すでに世界的なものであり、人脈も日本最高峰の詩人から、米国の口承詩研究の第一人者まで幅広い。この連詩の試みは、2年後には海外からのゲストを招いた文化庁事業へと拡大された。「くまもと連詩『声がつながる』～口承連詩の試み」⁴がそれである。出演者は、谷川俊太郎、覚和歌子、ジェローム・ローゼンバーグ、四元康祐、伊藤比呂美、ジェフリー・アングルス（翻訳）であり、熊本から世界に向けて連詩を発信する試みであった。

熊本文学隊は、その他にもさまざまなイベントを手掛けてきたが、2014年には、近年ますます評価の高まる在熊の評論家・渡辺京二を迎え、伊藤比呂美、谷口絹枝、そして優れた日本文学の翻訳紹介者で石牟礼道子に大きな関心を抱くジェフリー・アングルスを加え「いま石牟礼道子を読む」⁵を開催した。この熊本

が世界に誇る至宝、3.11以降存在感を増すばかりの石牟礼道子に関するイベントには、新聞・雑誌・TV等さまざまなメディアが取材に詰めかけ、全国的な注目を浴び、その録画はウィメンズ アクション ネットワーク (WAN) によりインターネットを通じて全世界に配信された。同シリーズの第二回は、大成功した世界文学全集に続いて日本文学全集にも石牟礼道子の巻を設けた池澤夏樹を再び迎え、2015年11月15日に電気館において開催される。

2. 地域貢献と「草枕」の世界的価値

世界を股にかける伊藤を主軸とした活躍に対して、在熊の隊員の地域に根ざした活動もまた重要であろう。稿者は、熊本県生涯学習推進センターにおいて、「熊本から生まれた文学の新しい波～熊本文学隊・伊藤比呂美」⁶の講師を務め、「くまもと連詩『声がつながる』～口承連詩の試み」のような大イベントがなぜ熊本で可能なのか、その過程を現場でまさに体験しつつある熊本文学隊代表世話人として解説した。これは、生涯学習・生涯教育的側面における熊本文学隊の活動の可能性を示すものである。

また伊藤は、クラシック音楽を好んで聴くが、ピアニストのグレン・グールドの大ファンであり、グールドにまつわる詩も書いている⁷。そして、そのグールドと、熊本に縁の深い夏目漱石の「草枕」には、実に興味深い関係があるのだ。ここには現代の存命の作家たちの活動を中心とした通例の熊本文学隊のイベントとは異なる可能性が潜んでいる。日本近代文学の研究者である稿者にとっては、夏目漱石に関する研究を活かした地域貢献もまた重要な活動分野の一つである⁸。その萌芽は「夏目漱石『草枕・二百十日』発表100年記念『五高時代の漱石先生』展示パネル」⁹、および「熊本近代文学館連続講座 漱石の文学」¹⁰である。

この内容を発展させ、玉名市の草枕交流館において

「究極の天才ピアニストが愛し続けた『草枕』」¹¹という講演を行った。同館は、夏目漱石の小説「草枕」の歴史資料館かつ「草枕」の観光案内施設として2006年4月23日にオープンしたもので、天水・草枕の里観光協議会と密接な関係にある。これからの大学が地域に対して果たすことのできる役割の可能性として、文学研究・生涯学習を通じた観光への貢献もまたクローズアップされてくるかもしれない。

この講演は、カナダの世界的ピアニスト、グレン・グールドが「草枕」の愛読者であったという事実に基づいており、第1回熊本大学サマースクール「五高記念館で漱石を学ぶ」において稿者が担当した講座¹²にもその内容が引き継がれた。さらに2008年の講演の好評を受けて、再度草枕交流館より同じ内容での講演依頼があり、それはその後の研究の進展を加えた講演「グレン・グールドと『草枕』」¹³となった。本稿は、概ねこの内容に基づいている。

3. 「草枕」の輝きを取り戻す

かつて「草枕」は、国語の定番教材であった。橋本暢夫の調査によれば、旧制中等学校の読本中、漱石作品は305種、878冊に収録されており、作品の登場回数を数えるならば、有名な「吾輩は猫である」が195回であるのに対して、「草枕」は407回もの数を誇る。ちなみに「草枕」と同じ年に発表され、やはり熊本が舞台となっている「二百十日」は22回である。現在中学校の定番教材である「坊っちゃん」は1回しかない¹⁴。漱石作品としては現在おそらく最も多くの国民に読まれていると思われる『こゝろ』の教材化は、実は戦後なのだ。今では少々難解な印象によって敬遠されがちな「草枕」の407という回数は、古いものであるにせよ注目すべきものである。

もちろん、時代の推移により「草枕」を教科書にそのまま復活させるということには、多大な困難が伴うであろう。しかし、熊本への地域貢献を考えるならば、このような非常に高いポテンシャルを秘めた作品が顧みられなくなっていくというのも、実に勿体ない話ではないだろうか。

草枕交流館は奮闘しているが、玉名市民、熊本県民に、「草枕」の世界的な価値が十分に理解され、共有されているとは言いがたい。この状況に働きかけ、「草枕」の世界的な価値を熊本内外に知らしめ、文化都市・熊本の発展に資するためにはどうしたらよいのであろうか。これが本稿の問題設定である。これからの社会的貢献が求められる文学研究は、伝え方についても工夫が必要であり、ビジネスの分野でも活用されている社会心理学の知見も視野に入れていく必要があるだろ

う。

そこで稿者の立てた戦略は、まず「草枕」そのものを扱うのではなく、世界的に活躍する一流の表現者が、「草枕」の何に注目し、それをどのように評価しているのかという観点から、その世界的な価値をあぶり出し、世界的表現者の権威やそのファンたちの社会的証明の力を借りながら、受講者の共感を醸成していくというものである¹⁵。その世界的な「草枕」愛読者の代表がグレン・グールドなのであるが、比較的年齢が上の世代の生涯学習的な場面で有効であるという手応えを感じている。

4. 「草枕」とグレン・グールドの深いつながり

まず、熊本の人々に最初に理解してもらいたいのは、「草枕」とグレン・グールドのつながりに関する事実関係である。

もっとも注目すべきなのは、1982年にグールドが亡くなったときのエピソードである。彼は「九月二十五日に満五十歳の誕生日を迎えた二日後の二十七日午後二時頃目覚め、体の異常に気がついた。半身が麻痺して脳卒中の発作を起こしていた。秘書のような役割をしていた友人のレイ・ロバーツを電話で呼び、彼によってトロント総合病院に運び込まれた」¹⁶。しかし容態は悪化し、10月4日に没した。さまざまな伝説に彩られた彼の生涯の最後の伝説は、枕元に残された書物であった。

「両親から贈られて何度も読み返してぼろぼろになった聖書とともにあったのは、書き込みをした夏目漱石の『草枕』だった。この『草枕』こそ、グールドが死に至るまでの十五年間、彼の頭から離れることがなかった愛読書だったのである」¹⁷。意外なところで、意外な人物が『草枕』を愛読していたのである。もちろんこの『草枕』は英訳で、後に清泉女子大学の教員となる日本文学研究者アラン・ターニー(Alan Turney)の手になる*The Three-Cornered World*. London: Peter Owen, 1965であった。

グレン・グールドの枕元に残されたのが聖書と『草枕』(The Three-Cornered World『三角の世界』¹⁸)の2冊であったというのは、定説化しているようであるが、宮澤淳一は、上記にも登場するレイ・ロバーツから新たな証言を引き出している。「聖書はグールドの死後、彼の父親が置いたのだそうです。つまり、グールドの最後の日々に枕元に置かれていたのは、『三角の世界』一冊だけだったのです」¹⁹。

西洋からの影響によって成立した日本近代の小説が、逆に西洋世界で認められたという稀なケースであるが、芸術ジャンルを飛び越えての伝播という点もま

た意外性があり、注目すべき事態と言えよう。

5. グレン・グールドがいかに素晴らしい世界的ピアニストか

また、念のため、グレン・グールドがいかに素晴らしい世界的ピアニストかということについても熊本の人々に説明しておく必要があるだろう。

グレン・グールドとは何者か。彼は、名盤と言われる二種の「ゴールドベルク変奏曲」によって知られる極めてユニークなカナダのピアニストである。数々の奇行で知られ、6月の暖かい日でも真冬の服装をしていた。

彼のステージ・マナーは独特で、それが好奇的となり、またときに批判も受けました。ほさほさの髪、くたびれたダークスーツで舞台に現れると、丈の低い椅子（約三十七センチメートル）に腰掛け、下にブロックを敷いて鍵盤の位置を高くしたピアノに、前かがみで向かう。足を組み、鼻歌をうたいながら演奏し、片手が空くと、他方の手を「指揮」した。こういった奇矯な振舞いは聴衆を当惑させもしたし、おもしろがらせもしました²⁰。

そしてそれは、楽譜の指示に反したり、通例と異なる解釈による演奏であった。「コンサートは死んだ」の名言を残し、32歳で聴衆の前での演奏をやめてしまい、レコードの発表のみで聴衆に音楽を届けたのである。それは、よいテイクの継ぎ接ぎ編集によるレコードであり、批判も浴びたが、実際には専門家にもどこどこを継ぎ接ぎしているのかは言い当てることはできなかった²¹。

演奏のスタイルやマナーがおかしいのは、若い頃から天才として活躍し、子ども時代のスタイルを変えなかったからである。その演奏は素晴らしく、世界中の専門家から高い評価を受け、世界中にファンがいた。日本でも、坂本龍一のようなミュージシャンの他、谷川俊太郎、浅田彰のような文学者・文化人がファンとして知られており、前述のとおり熊本文学隊隊長の伊藤比呂美もその例に漏れない。

6. 「草枕」とグレン・グールドとの出会い、受容

そのような天才ピアニスト、グールドがなぜ「草枕」の愛読者となったのか。事実関係を追ってみよう。

まず、夏目漱石が「草枕」を発表したのは、明治39年（『新小説』1906・9）であった。それからほぼ50年後の1955年に、グールドは衝撃的な最初の「ゴールドベルク変奏曲」の録音を行う。やがて彼は、1964

年に演奏活動から32歳で引退してしまう。「コンサート・ドロップアウト、つまり聴衆の前で演奏する活動からの引退は、演奏家にとって死をも意味する重大事であるはずだ」²²が、グールドは見事にレコード、テレビ、ラジオ等のメディアを通じてのみの芸術家として成功した。

翌1965年、『草枕』の英訳 *The Three-Cornered World* が刊行されるが、グールドは直接にこの本に出会ったのではなかった。1967年、奇しくも漱石生誕100年の年、35歳のグールドは汽車の旅でノヴァ・スコシア大学のウィリアム・フォーリー教授に偶然出会い、親しく会話を交わすことになるのであるが、彼こそがグールドと *The Three-Cornered World* を仲介した人物である。「教授は当時読んで、大いに感動を受けた夏目漱石の『草枕』英語版の話をした。教授は後日この本をグールドに送るのだが、これはこのピアニストの生涯を通じての愛読書となるのだった。後年グールドはこれを二十世紀最高傑作の小説の一つと公言して憚らず、従姉にこの本を丸々一冊電話で朗読して聞かせたほどであった」²³。

1981年、グールドは再び「ゴールドベルク変奏曲」の衝撃的な録音を行い、12月にカナダ放送協会（CBC）のラジオで『草枕』第一章の一部を朗読する。そして、前述のとおり1982年死去し、枕元には『草枕』だけを残した。さらには「オタワのカナダ国立図書館には二万点ものグールドの遺品が保管されているが、その中に“Notes to Shihoda's Daughter” [志保田の娘のメモ] なる三十七ページの覚書が残されている」²⁴。彼の『草枕』への並々ならぬ関心は疑いようのないものと言えよう。

7. 「草枕」の勘所

日本の近代とは、端的に西洋からもたらされる影響にどのように対応すべきかという問題であった。そこから生まれた文化が、逆に西洋世界に与える影響はなかったのだろうか。まず、熊本の人々に理解してほしいのは、「草枕」が西洋中心主義的価値観への挑戦であるということである。「草枕」の難解さは、まさにここに由来する。そして、グールドの反応も、ここをめぐってのものであろう。

明治33年、第五高等学校教授の夏目金之助は、官命によりイギリス留学を命ぜられ、4年3ヶ月を過ごした熊本を離れた。後に国民作家となる夏目漱石である。ロンドンで留学生活を送った漱石は、まさにそこで圧倒的な西洋文明と対峙することとなり、精神を病んで帰国する。

精神的にまいっていた漱石に小説を書くことを勧め

たのが、親友・正岡子規の弟子であった高浜虚子であった。それを受けて明治38年1月『ホトトギス』に発表した「吾輩は猫である」は大好評をもって迎えられた。漱石は、翌39年には「坊っちゃん」(4月)「草枕」(9月)「二百十日」(10月)といった名作を立て続けに発表する。

中でも異彩を放っているのが熊本小天温泉を舞台にした「草枕」である。これは、長い鬱屈に捉えられ続けていた漱石から迸り出た、小説という近代西欧が生み出した文学ジャンルそのものへの挑戦であったと言っても過言ではないのだ。

7. 「俳句的小説」とは何か

なぜ、ウィリアム・フォーリーは、グールドに『草枕』を贈ったのか。『『草枕』の画工とグールドには共通した世界があることに気づいた』²⁵からである。しかし、その具体的な内容はどのようなものなのか、明らかにされているとは言いがたい。

画工もグールドも、世俗を離れて、那古井の里を目指したり、スタジオに籠って芸術的感興を追求する。問題は、そこに潜む伝統的な西欧の芸術を越える意思である。まずは、「草枕」中の記述を確認しよう。

レッシングと云う男は、時間の経過を条件として起る出来事を、詩の本領であるごとく論じて、詩画は不一にして両様なりとの根本義を立てたように記憶するが、そう詩を見ると、今余の発表しようとあせている境界もとうてい物になりそうにない。余が嬉しいと感ずる心裏の状況には時間はあるかも知れないが、時間の流れに沿って、逐次に展開すべき出来事の内容がない。一が去り、二が来り、二が消えて三が生まるるがために嬉しいのではない。²⁶ (『草枕』六)

ここで言及されているレッシングの『ラオコーン』は、「絵画や彫刻と詩や文学の芸術法則の違い明らかにした画期的な理論」²⁷であるが、「草枕」は、まさにそのような西欧の芸術、また芸術理論の達成に向かって疑義を差し出すのだ。

「草枕」九における「小説も非人情で読むから、筋なんかどうでもいいんです。こうして、御籤を引くように、ぱっと開けて、開いた所を、漫然と読んでるのが面白いんです」という箇所もまた非常に有名であるが、これを見てもわかるように、「草枕」の最大の特徴は、十九世紀西欧小説批判の小説であるということである。

もちろん漱石は、「筋」が明確な小説らしい小説を書くこともできた。典型的なのは、高校国語教科書にもその一部分が採録されている『こゝろ』(1914 [大

正3]年)である。小説の小説たる所以「筋」は、後にE・M・フォスターによるプロットの理論²⁸として明確化されるが、漱石の言う「逐次に展開すべき出来事の内容」のさらに「因果関係」にその枢要部がある。例えば、『こゝろ』における書生「私」は、鎌倉で「先生」に出会い親しくなるが、「先生」は謎の墓参りを習慣としており、その謎はすぐには「私」には明かされない。物語の進行に従って、徐々に「先生」の墓参りの原因が、若き日の「先生」と友人「K」の自殺にまつわるものらしいということが明らかになっていくのであるが、このような出来事と出来事の間を、事実のつながりとしての隣接関係、因果関係のリアリズムで組織していく小説記述の組立の機構が「筋」である。つまり、「草枕」の画工は、このような出来事と出来事の実事のつながりの軛を切断したがつているのだ。この切断の意志こそが「草枕」における「非人情」(detachment)なのである。そのような事実のつながりの隣接関係よりも、どちらかと言うと類似関係のような想像上の飛躍が優勢なジャンルが韻文、詩である。

漱石は、「草枕」において日本伝統の詩的韻文・俳句を西欧伝来の小説に対立させたのだ。ゆえにこの「小説を批判する小説」を、漱石は「余が『草枕』において「俳句的小説」と呼んだ。「で若し、この俳句的小説——名前は変であるが——が成立つとすれば、文学界に新しい境域を拓く訳である。この種の小説は未だ西洋にもないやうだ。日本には無論無い。それが日本に出来るとすれば、先づ、小説界に於ける新しい運動が、日本から起つたといへるのだ」²⁹。この漱石による自己解説には、「草枕」が世界最先端なのだという気概が込められているのに注意せねばならない。実は、「草枕」は、非常に欲張りな試みである。

そもそも「俳句的小説」とは、どのような事態と考えたらよいのであろうか。当然のことながら、俳句的小説は俳句的小説であって、俳句ではない。そこには自ずから、小説的な時間の流れがあり、「筋」がある。

「草枕」は、画工の思索がどこまでも展開し、随所に東西の詩や画工の芸術論が紹介され、「筋」の進行がまるで放棄されたかのごとく停滞し、小説のつもりで読んでみると読みにくいことこの上ない。多くの読者が途中で放り出してしまうのも無理はないのである。それは、読者が小説に対して抱いている期待をことごとく裏切ることそのものを目的としているからだ。

一方「草枕」は、なかなか描くことのできなかった画工の「胸中の画面」が、那美の見せる「憐れ」の表情によって「咄嗟の際に成就」という結末を持っている。つまりそれは、画工の絵がいかにして、どのような出来事のつらなりにおいて、何が原因となって

完成するか、それによって物語がいかにか結末にたどり着くかという「筋」、小説的側面を確かに持っているのだ。ゆえに「草枕」は、まさしく「俳句」ではなく「俳句的小説」である。

小説という時間の順序や因果関係が重視される芸術の枠の中で、そのような時間的軛から解放された非西洋的な詩情を俳句に託して追求する「草枕」は、このように見てみると、非常に野心的で実験的な試みであることがわかるであろう。そして、実際、ここには水と油を混ぜようとするかのような、相当の無理がある。もし、無理でなければ漱石はこの路線をもっと続けていたはずであろう。漱石の才をもってしても、一回しか成立しないような、微妙な均衡の上に成り立つ奇跡的な「小説的のような何ものか」が「草枕」なのだ³⁰。

8. 響き合うグールドと『草枕』

画工が那古井の里で「非人情」を追求していたように、グレン・グールドが録音スタジオで追求していたのも、一種の「非人情」と言えるかもしれない。まずは、1955年版「ゴールドベルク変奏曲」について確認してみよう。

実はこの名盤誕生の前年にも、グールドは「ゴールドベルク変奏曲」を演奏している。それは、1954年のカナダ放送協会（CBC）における生放送であり、その録音が残されているのだが、それは非常に情感的な表現であったという³¹。

ところが、1955年版は情感を排して疾走するかのような演奏に激変するのだ。グールドは、楽譜にある反復記号さえ無視し、通例60分超かかる演奏を39分弱で弾ききってしまった。次々に中立的な演奏を弾き飛ばしていくこのスタイルは、もちろん生演奏では不可能である。いくつものテイクを重ね、全体の調子が統一されるように、グールドの意図に沿った箇所を選びとって継ぎ接ぎし、映画のフィルムを制作するように編集加工を施すことによって可能となったレコード芸術だったのだ³²。宮澤淳一が紹介するグールド自身によるライナーノーツで、グールドは次のように言っている。「要するにこれは、終わりも始まりもない、真のクライマックスも真の解決もない音楽、ボードレールの恋人たちのように、『気ままな風の翼にそっと休らっている』音楽なのである」³³。

漱石が、俳句に託した時間の軛からの開放を、グールドはボードレールの詩³⁴に託しているのが注目されるが、両者の発想が、時間・空間を超えて響き合っていることに驚かされる。「余が嬉しいと感ずる心裏の状況には時間はあるかも知れないが、時間の流れに

沿うて、逐次に展開すべき出来事の内容がない。一が去り、二が来り、二が消えて三が生まるるがために嬉しいのではない」という画工の志向するものは、まさに「終わりも始まりもない、真のクライマックスも真の解決もない」状態ではなからうか。

ジョーン・ヘブによれば「グールドは性格的にも線的 [linear] なものより、多声的 [polyphonic] なものを好んだ」³⁵ という。グールドもまた音楽という時間の流れこそが重要であると思えない芸術領域において、その当たり前に見える軛からの開放を企図していたのである。「草枕」の画工と違って、テクノロジーの力を大いに借りつつではあったが。

もし、日本とカナダの文化的芸術的共通点というものがあるとすれば、ヨーロッパという文化の中心地から遠く、西欧の伝統に縛られない発想が可能であるということではないだろうか。例えば、グールドとも親交のあった同じカナダ人であるマーシャル・マクルーハンは、英文学・比較文学の研究者であったが、グーテンベルクの発明した印刷技術から文学を眺めるという自由な発想によってメディア論の創始者となり、今日のインターネット時代を予見した。日本からも、グールドやマクルーハンのような革新的文化人がもっと誕生して良いはずなのである。

その点において、漱石の「草枕」が、グールドと響きあう革新性を有し、この世界的な天才ピアニストが亡くなるまでの15年間、その心を捉え続けた事実を、我々はもっと誇って良いのではないだろうか。

グールドと「草枕」との出会いは、1955年版「ゴールドベルク変奏曲」と1981年再録音版「ゴールドベルク変奏曲」との間に挟まっている。1981年版に『草枕』の影響はあったのであろうか。

宮澤淳一によれば、「基本的に同じ作品の再録音をしない」グールドが「ゴールドベルク変奏曲」を再録音した理由は3つあるという。「第一の理由は、五五年録音のデビュー盤がモノラル録音で、音質にも限界があったため」、「第二の理由は、映像作品を同時に作るため」、「そして第三の理由（結果論かもしれませんが）は、新しい解釈を示すこと」である。「突き上げるような『推進力』の現れ」、「パルス」により調整され統一された1981年版は、「ゆったりとしたアリア、そして力強く、よどみなく進んでいく変奏——。緊迫した音楽」³⁶ となった。

これもまた前作に勝るとも劣らない名盤の評価を得た1981年版「ゴールドベルク変奏曲」の「ゆったりした」それでいて「緊迫した」調子は、「不愉快なことは一切避けて」「人生の苦を忘れて、慰藉する」（漱石「余が『草枕』」）と言いつつも、実のところ世界最先端の気概と野心に満ちた「草枕」に通ずるものがあ

ると言えないだろうか。グールドのゴールドベルクを本来あるべき姿へと導いたのが「草枕」であると立証できたなら、どんなに素晴らしいことであろう。その可能性は今後も追求されねばならないし、またそれは熊本の我々が取り組むべき重要な課題の一つである。

9. 地域から世界へ

漱石の人気作品 No.1 と言えば、「草枕」と同じく明治 39 年発表の「坊っちゃん」かもしれない。少なくとも知名度や四国・愛媛県の観光への貢献度という点においては、圧倒的に向こうが上であろう。

しかし、世界的な視野で見ると、西洋音楽を極めた最高峰のピアニストをも唖らせ、虜にした「草枕」こそは、世界に誇るべき真の芸術作品であり、熊本の我々は、もっとそのことを自覚すべきなのである。草枕交流館を主軸としつつ、そこに国語、英語、音楽、美術、教育（史）等々といった方面からの貢献を模索していくことに、大きな可能性を見出すことができるはずである。地域に根ざしながら、世界へと文化的価値を発信することができる類まれな素材こそが「草枕」なのだ。

また、熊本の我々は、熊本近代文学研究会の『方位』における夏目漱石特集や、中村青史、村田由美といった熊本において地道な「熊本の漱石」研究を積み重ねてきた先人の成果に敬意を払いつつ、接続を図っていく必要があるかもしれない。例えば、横田庄一郎の『「草枕」変奏曲 夏目漱石とグレン・グールド』（1998・5、朔北社）は、熊本取材も織り込んでいるにもかかわらず、漱石が宿泊した前田家別邸の主、前田案山子の名に「あんざんし」という間違っただけを振っているが、地元で調査すれば「かがし」であることは簡単に判明するのである。そのような点においても「草枕」に関しては、熊本において地域に根ざした研究ができることの強み、アドバンテージを、中央での研究に対して主張することができるのだ。

10. 結論と今後の課題

地域に根ざし、世界へと文化的価値を発信するために、グレン・グールドのような「一流が認めた世界的価値」という側面からのアプローチの有効性は、熊本文学隊のような世界的な情報発信の実績のある動きとも連動させつつ、これからも検討されていくべき重要な課題と言える。

今回はグレン・グールドと「草枕」の関係から、「草枕」の世界的な価値を明らかにすることを試みたが、これは、比較的上の世代に有効なアプローチかもしれない。

より下の世代に対して「草枕」の世界的な価値を理解してもらうための方策が今後の課題の一つとなるであろう。

それについては、やはり世界的に評価の高いアニメーション監督・宮崎駿が有効かもしれない。宮崎駿は、『崖の上のポニョ』（2008・7 公開）において、仰向けで海を泳ぐグランマンマーレというキャラクターを造形した。これは、仰向けで水上に浮かぶ「草枕」中の「オフェリヤ」像にインスピレーションを得たものである³⁷。稿者は、それを承けて、前記「究極の天才ピアニストが愛し続けた『草枕』」（2008）において、宮崎駿自身が草枕交流館において「草枕」に関する講演をすべきであるという提案をしたのであるが、もちろんそれは実現しなかった。

しかし、その後、2010 年 11 月のスタジオジブリの社員旅行という形で、宮崎駿は草枕交流館および「草枕」の舞台となった前田家別邸を訪れたのである。そして、『風立ちぬ』（2013・7 公開）においては、前田家別邸の漱石が宿泊した部屋が、主人公堀越二郎と菜穂子のつかの間の新婚生活の部屋として、ほぼそのままの造形で用いられた。

このような事実から出発しつつ、「草枕」と宮崎駿の何が響きあうのかということ考察するならば、どうなるか。この内容は、すでに本学部と附属中学校による「学びの交流会」³⁸、および玉名高等学校附属中大学訪問³⁹において中学生に講じている。両校の生徒から寄せられた好意的な感想の数々は、学校教育における「草枕」の部分的復活に手応えを感じさせるものであるが、詳しくは他日を期したい。

いずれにしても、これらは、地域に根ざしながら世界へと発信する、熊本文学隊の精神と響きあうものであり、「草枕」の世界的価値、熊本の文化・教育をより豊かなものにしていく可能性についてさらなる考察を加え、地域貢献、生涯教育、学校教育を連関させながら、世界へ向けて情報発信していくことが今後も可能であろう。

そして、さらにこれを本学部における教育に反映させていく可能性についても追求していかねばならない。現場において児童生徒の実態に即した授業ができる基本的な専門的力量に加えて、熊本ならではの文化的価値を理解し、総合的な学習の時間等、児童生徒の主体的な課題探究型の学びにおいて「草枕」のような地域の宝としての文化的表象を扱うことができる「付加的な専門的力量」を備えた教員の養成である。これもまた、地域に根ざしながら世界へ羽ばたく本学のありべき姿に合致する重要な課題となろう。

そのように考えるならば、むしろ、一般にはなかなか理解し難いある種のとっつきにくさを「草枕」が有

していることが、逆にチャンスになるかもしれない。熊本で学ぶことによって、より効果的に「草枕」の世界的な価値の勘所を理解解説できるようになり、より質の高い地域への貢献を果たすことのできる人材になるという道筋である。

実際に、熊本市内の芳野小学校においては、

明治30年12月27日夏目漱石先生が本校区を通られ、小天へ小旅行されたのになら、本校では毎月27日を「漱石の日」とし、学校挙げて俳句活動に取り組んでいます⁴⁰。

という「よしの俳句活動」が行われており、これは「草枕」と直接的なつながりがある。また、『「草枕」国際俳句大会』の関連行事で、毎年7月下旬頃に夏目漱石内坪井旧居で行われている「漱石さんの俳句寺子屋」には小学生の児童たちが集う。また、黒髪小学校による児童向け郷土読本『近代教育発展の地 くろかみ』にも、もちろん漱石の名が確認できる⁴¹。

このような地域での活動に貢献できる人材の育成は、今後ますます重要になってくるものと思われるが、本学教育学研究科においても教育学部においても、「草枕」を中心に熊本の漱石を研究したり、「草枕」そのものを研究対象とする学生は着実に育ってきており、この流れを継続発展させていくことの重要性については言うを俟たない。直近に迫っている漱石没後100年(2016年)、漱石生誕150年(2017年)の熊本における関連事業においても、本学は教員・学生を挙げて貢献を果たしていくことができるはずなのだ。

注

- 1 池澤夏樹「世界文学ってなんだ？」(2008年7月9日、熊本県立図書館3階大研修室、主催：熊本近代文学館・熊本文学隊・熊本県立図書館)
- 2 石牟礼道子『苦海浄土』(池澤夏樹=個人編集 世界文学全集 第3集、2011・1、河出書房新社)
- 3 谷川俊太郎／伊藤比呂美／四元康祐「連詩の魅力」(2008年8月31日、熊本県立図書館3階大研修室、主催：熊本近代文学館・熊本文学隊・熊本県立図書館)
- 4 谷川俊太郎／覚和歌子／ジェローム・ローゼンバーグ／四元康祐／伊藤比呂美／ジェフリー・アングルス(翻訳)「くまもと連詩『声がつながる』～口承連詩の試み」(2010年3月20日、青年会館ホール[熊本市総合体育館2階]、文化庁「地域文化芸術振興プラン関連事業」、主催：熊本文学隊、熊本近代文学館、文化庁、熊本県、熊本県地域文化芸術振興プラン実行委員会)
- 5 渡辺京二／伊藤比呂美／谷口絹枝／ジェフリー・アングルス「いま石牟礼道子を読む」(2014年7月20日、熊本市現代美術館アートロフト、主催：熊本文学隊)
- 6 跡上史郎「熊本から生まれた文学の新しい波 ～熊本文学隊・伊藤比呂美(熊本県生涯学習推進センター「くまもと県民カレッジ」)のコース「火の国発・情熱の文化人たちⅡ～その生き様を追う～」」(2010年2月18日、熊本県民交流館パレオ会議室7)
- 7 伊藤比呂美「Glenn Gould Goldberg」(『毎日新聞』1988・4・1→『伊藤比呂美詩集』1988・11、思潮社)
- 8 跡上史郎「日本の行く末 小説で問う」(『熊本日日新聞』2015・1・17)は、グールドとは関係ないが、『熊本日日新聞』の文化欄「熊本の『漱石』」を姜尚中、夏目房之介に続いて担当した連載企画の第3回であり、熊本と漱石の文学の関係を、最新の漱石研究の動向とともに、わかりやすく熊本の読者に解説したものである。この紙面のコピーは、熊本大学教育学部附属中学校の城音寺明生教諭の協力により、同校の2年生に配布され、稿者のもとに多くの附属中学生の好意的な感想が寄せられた。
- 9 跡上史郎・坂元昌樹・村田由美「夏目漱石『草枕』二百十日』発表100年記念『五高時代の漱石先生』展示パネル」(2006年11月3日～12月10日、熊本大学五高記念館)
- 10 跡上史郎「漱石と現代文学—現代文学の隘路を問う」(「熊本近代文学館連続講座 漱石の文学」第6回、2006年12月9日、熊本県立図書館3階大研修室)
- 11 跡上史郎「グルメと温泉と文学の集い 究極の天才ピアニストが愛し続けた『草枕』」(2008年9月14日、草枕交流館)
- 12 跡上史郎「松山の『坊っちゃん』VS.熊本の『草枕』(第1回熊本大学サマースクール『五高記念館で漱石を学ぶ』講座⑦)」(2010年8月27日、熊本大学五高記念館)
- 13 跡上史郎「グレン・グールドと『草枕』」(2015年8月22日、草枕交流館)
- 14 橋本暢夫『中等学校国語科教材史研究』(2002・7、溪水社)
- 15 「権威」「社会的証明」については、ロバート・B・チャルディーニ『影響力の武器 [第三版]』(2014・7、誠信書房)参照。
- 16 横田庄一郎「『草枕』変奏曲 夏目漱石とグレン・グールド」(1998・5、朔北社)
- 17 同前。
- 18 「草枕」中の「四角な世界から常識と名のつく、一角を磨滅して、三角のうちに住むのを芸術家と呼んでもよからう」に基づく。
- 19 宮澤淳一「グレン・グールド 鍵盤のエクスタシー」(『知るを楽しむ 私のこだわり人物伝』2008・4、日本放送出版協会)
- 20 同前。
- 21 同前。
- 22 相澤昭八郎「レコードアーティストとしてのグレン・グールド」(横田庄一郎編『漱石とグールド 8人の「草枕」協奏曲』1999・5、朔北社)
- 23 サダコ・グエン「北のピアニストと南画の小説家」(横田庄一郎編『漱石とグールド 8人の「草枕」協奏曲』

- 1999・5, 朔北社)
- 24 同前. これは『『草枕』を題材としたラジオ番組』のための覚書である.
- 25 前掲 (横田)
- 26 「草枕」からの引用は、広く熊本のひとびとにその価値にふれて欲しいという本稿の趣旨に基づき、無料で読むことのできる「青空文庫」に拠る。以下同.
- 27 「レッシング, ゴットホルト・エフライム」(平岡敏夫・他編『夏目漱石事典』2000・7, 勉誠出版)
- 28 E・M・フォースター『小説の諸相 E.M. フォースター著作集 8』(中野康司訳, 1994・11, みすず書房) 原著 1927.
- 29 夏目漱石「余が『草枕』」(『文章世界』明治 39・11) 引用は『漱石全集』第 25 卷 (1996・5, 岩波書店) より.
- 30 「グレン・ゲールドと『草枕』」(2015 年 8 月 22 日, 草枕交流館) の受講者から、逆に「小説的俳句」はあるのかという質問が寄せられ、非常に示唆的であった。もしあったとすれば、それは、小説的な事実の隣接関係を主軸とした俳句であり、詩的に飛躍するレトリックは抑えられることなるはずである。それは、およそ俳句としては評価されないようなものであろう。俳句と小説という相反する要素を同居させることの困難が、この事例からも窺える。
- 31 前掲 (相澤, および宮澤)
- 32 前掲 (相澤)
- 33 前掲 (宮澤)
- 34 『悪の華』中の「恋人たちの酒」.
- 35 ジョーン・ヘブ「ゲールドと『草枕』の旅」(横田庄一郎編『漱石とゲールド 8 人の「草枕」協奏曲』1999・5, 朔北社)
- 36 前掲 (宮澤)
- 37 「『ハウルの動く城』の制作後に宮崎監督は、夏目漱石全集を読みふけ」ったが、「草枕」によって「ミレイの“オフィーリア”」を知る。「この魔性の絵に興味をもった宮崎監督は、実際に訪英し、この絵を目の当たりにします」.(「夏目漱石”に意外なルーツ」<URL:<http://www.ghibli.jp/ponyo/press/keyword/#entry5001>> 2015 年 9 月 27 日閲覧)
- 38 「宮崎駿は、なぜ夏目漱石のファンなのか?」(2015 年 9 月 4 日, 熊本大学教育学部)
- 39 「大学を知る」(2015 年 9 月 15 日, 熊本大学教育学部)
- 40 「よしの俳句活動」<URL:<http://www.kumamoto-kmm.ed.jp/school/e/yoshino/haikukatudou.htm>> 2015 年 9 月 27 日閲覧
- 41 「『近代教育発展の地』に誇りを」(『熊本日日新聞』2012・1・20)